援字選語抄

下

特別
ホ2
5652
2

言語　八條

○いへのかせ　家風 カフウ イヘノフリ　珠城の色 ふるきいろ　古風

拾遺集雑上　菅原のおとゝかうふりし侍りける夜

はゝのよみ侍りける

久方の月の桂もをるはかり家の風をもふかせてしかな

後拾遺集雑四　後三条院御時月あかゝりける夜侍る人

ゝをめしあつめて詩つくらせ給ひける中にて

まそ人ゝ歌をよみ侍りけるに

後三條院越前　越前守經宗女

いにしへの風ふく宿にわすれしはまたかゝる言の葉ちりなくと思へ

金葉集雑上

此集撰しけるとき家の集めしけれはたてまつる
とてよめる　藤原顕輔朝臣

家の風ふかぬものから恥かしの森のことのはちらしはてつる

二条院讃岐家集　三河内侍の家をたちいてゝくやみ
ひかしかえましける

花ちりし身にもあらなむ色ふかくいひける家の風にあらなん

返し　三河内侍

春の内に思ひあまりし花の香をいかなる家の風かさそはん

山家集下　寂超為忠か家にてあまた見し又かよう
と寂然かもとへ申つかはして新院（崇徳）へまいらせけるを

さきにくれのことをかきて荒に侍りける　想空

このとをり

家の風つたふるかたはあらしともちらさぬなけの言の葉

返し

家の風むかしに吹へき本のえたはかたちはかはらぬに言の葉

同集　新院百首よめりけるにおなしとて右大将きん能

今さそとをりえせにまし侍りけれは返しかいとて

家の風吹つたへけるひあれてちるさへ言葉のめつらしき哉

返し

家の風吹たえぬるをものゝひたえのそのまてさそあれ

桜あるは家の風ハ以への ふりといふんみてわきまへこの世といひ
てハおとろうるのへ見され蓬家の母君おぼしめしよませまへ
きえい為損其(佐き)の思しれ而ち光る人も見ひてうつむへきに
ハあゆみ侍し 又

日本紀竟宴歌詠得目入彦五十狭茅天皇歌
大納言正三位兼右近衛大将陸奥出羽按察使藤原朝臣
實頼 清慎公
意気美都耳倶迩散嘉江計流満幾牟玖濃多萬紀農賀
勢芳伊麻蒙能古礼利
續古今 賀ふも 入るる

拾玉集四

長坂家藻下 能守
右京のかみ政御母採集しけ給ひし給ひてこち寄りて侍しかまへ
槃例てのうら給つのをはりて
本のまゝに移とてなかき出しさよ家にその葉納ちらをうれ
之し 政輔々
家の風吹つたへてハ本のまゝにゆるらちもちれくちやそてかし

御し萬みちうゝその人もしも
なにはあやハいろしろのまかは
おほてら家のこの世と而るし珠城宮のふるといふへきあらは
きのこの世といひいみしふるといふへきをふるきこの世といつまで
うちハあら揺て思ひ而しみやあるんふるきこの世ハきてくらし
くて今ふみも気みるきちるちにしるふとかさゝる
○うきえ弱を 愁緒
拾玉集

桜あるゝ家の風ハむかしのふりといふらんやてはなきこの世といひ

てハはとこうなりのへもされたと蔭家の母君たちよませまて

まそいたる桜まれしにあつきよしみもえひてよろしへきに

ハあるはやし又

日本紀竟宴歌詠沿目入彦五十狭茅天皇歌

大納言正三位兼右近衛大将陸奥出羽按察使藤原朝臣

實頼公 清慎

意気美都耳倶迩散嘉江計流満幾牟珥濃多萬起農賀

勢芳伊麻蒙能古礼利

續古今賀　入もの

拾玉集四

ふるさとをいつて浅山にふせ庵し葛かつらそのくちも

飛鳥井集　懐舊

きけハ経古ころにむかしふるき風なほありはいにしへのまゝ川

おもひ家のこの世をわすれし珠城宮のふるさといまへすきたらは

きのこの世といひいにしへふりさといふへすきを ふるさとのこの世といへるを

ふるさとハあはれ住ひなしまやあはれふるきこの世ハきたなし

くても今もなみたきたちかゝるハ花かけなり

○うまれしを　愁緒

拾玉集

ちらち海てうれしへのなれハつれなれぬさて家ちう在任さし給

夫木集卅三同

寒さるに猪をたつるをともも俤みて慈猪をならかくちかるへき
松風しけく風かう心猪のうへはるとまろの風ひきてあれと慈猪を
うき人におもとよもハたとえいはるるたかへ雨ゆえ

○こうせのきたかぬ　風聞 フウブン

久安百首長歌　中納言右衛門督公能

このせのきたかえをつ免とも
堺をきか風聞の風ふ家をかせといふ家ハ石いきるかたくるき心ハ
きとよるをよとうふ世をみし　あまへと流して　つきぬのとか

もあらしやされとも袖のたえしくもなき袖かくへし

○こ楽の風流色　風流 ミヤビ

中原師光家集

あかつきの少将隆房侍ふ家にて侍りしに
車の風流なりと侍りしかえ又の日おもいて父の大納隆季
言おことにいひ遣し侍し
色深き花のいろの花ちりて　みるも風の音かれとえし
返し　大納言隆季
香をと思ふあたる花の色ゆゑに風の音かれもあかくこえとも
著聞集巻五に此贈答あり師光を大納言実国とあ
迷ひて師光家集にこえとも迷ひも著聞集のうハ誤也

あや浦れ家なるへし

按するに車の風流ハふりうとよひなれてかきなせる車之義成と
を車ぬしにかはるこそをもそ字の訓にまかせて風の流とまことそ
絶るハあらそりハ侍らむあひていふへきにもあらす

○こゝろのを 心緒 ミ二二ヨ

拾玉集

よみおもふこゝろの緒しそみしかきなつのよるを思ひなるかな

夫木集廿三同

按するにいきのをとなかれをかるの緒にてこゝろのをといふなり
こゝろハいきとつねにはなるへからねハ

○はらくろ 腹黒 ハラキタナシ

金葉集恋下 題しらす よみ人しらす

花ちらしこゝろやめる人のあはれなるからにはらのくろや

袋草紙 上暮 仍存其申之處後日詠之尤腹黒事歟

五品後悔云々

按するに神代紀に黒キタナシとかきたるをきたなしといへるはらきたなし
しといふはあはれしく人のおもひのきよからさるをいへるなる
ひあるをいふ黒の字をもちゐしもこゝろきたなきをいふそれをはらの
にこれるといふハ字にまかせていへる也之はらくろハいかに
ひてかなふへし

○むかうおもむき

散木集　光臨クワウリン　あかつきなる雨に人おきて待わたりけれはよめる

かれしやれ見ぬる間やまさぬらん君かけのおそむきかよしに

葉もるに人おきあると海ちかきたちて光臨とたのむ宿のうちふ

かくなりけるにきへて貴人なとにしては春の日おもひけるにあまりけれと

いふ之　新撰萬葉には光侯柯丹懸礼雪緒許曽冬之花

砥者可謂狩藝禮　又後撰集恋一　題しらす　人もこふうきまつり

あかにあそおける身はなえうへつゝ世をそ恨むる源氏総角

あかきなりけれはてもかきこほしのこふきあそきもろい

て光臨とおもえまつ　又新古今集雑下　西園寺右大臣　光もり

枝にかくれる家のいおもちさえもて拝とや人のつきけむさきもの

三首光あつとならまほし光臨をまつりんかいつかされは貴人を

似しては光まへなといふへしいふもののそむとさむいらさう吹え

てはあれといふならねは拝まれ拝むとあらんにむかふる

○むとされこれ　一流イチリウ

續拾遺集釋教　一流の書をかきおきしおかせ

前權僧正成源

谷川をなかむとれつきしかきとめて絶けりけるを人にみえせむ

後に出きしをとりてよみ侍ける

法印公澄

こゝろもとなくあはれに来りけて絶ゆる人もなき谷川の水
桜なる 一流をたどりて こゝにたえて見るかげも 詞もあ
りけれはおかしけれはまして此わざもあはれなるべし

楽名 二條

○あをうみのなみ 青海波 セイカイハ

千載集離別 源惟盛年頃なる人のとめて筆のあとを
わかれをおしみ侍りけるを土佐国に侍りける時川尻にて
たくさん侍りて東のかたへ参る青海波の秘曲のおもむき
ちりつもる数侍て其をしれ涙のみまさりてかくなむと
くに書つけて侍りける

入道前太政大臣 宇治 長公 師

をしへおくやまとことのなかはおもひたちの人はあをうみのなみはあはれまぬ

続詞花集にハ二句めのかはりあり 同詞集に

ハ絃句はかくれぬを保元物語には二三句との
たとへをとりつれは絃句あみにまかひむとあり
按するに楽名の青海波を訓みてなみとよめるはあまり細の
さとよみもをかしつるとよみつへし
○たなはたらく心あさくへ聞る　春鶯囀（シユンアフデン）
永久四年百首　笛　俊頼
あをやきをきぬ上人ふきならて春は鶯さへつるなり
夫木集同
源氏物語花宴　春のうくひすさへつるといふ舞は
いとおもしろくみゆ

案するに春鶯囀の曲をこゝに出せり 此春楽をさるをたに
かふとよくし秋風楽をも秋風を吹ならしといひあはせ
皆かれし例也 上にいひつる青海波をあをうみの波とよめる
もおなし詞にてはあるはかれとをとりてなもしれあしからし

器財 六條

○あまのぬまほこ 天之瓊矛 アマノヌホコ

日本紀竟宴歌 伊弉諾尊歌左註

あまのぬほをまほさいをろしくたして

續古今集雜中 太上天皇

わきくるのあをすなおろしゝほこのみちある國にこそ(て)かみのなかかな

按るに書紀神代紀に廼以天之瓊玉也此云矛を古事紀に(記)は天沼矛とあり沼は假字にて瓊の古言をぬと云へ神代紀に瓊響瓊々此云奴儺等母々由羅爾とありて(この紀に字多くあやまり流りとらは校本にてみるべし)奴儺等は瓊が響也此外にも玉の事をぬと云る例ありさればは瓊をぬと(知)

いひても冬とさみてもおとろへハなくの玉緒とも天之瓊矛ハ
古言にていひ来れるを瓊矛といふこそてハあしき之後
世のかたそれにいまひこ先なるをなお知らしてあるの玉まほか
とハなむまきなり

○たまのをの玉　念珠 ネンズ

新拾遺集恋二　ほさこらあの朝に玉をかきてとうに

たゐせ侍りけるに　伊勢大輔

人をまたぬ思ひのたまれをかえせハ行してあらぬ数をとまし

夫木卅二にも入たり

按るに秘蔵抄に内典有念珠経　今按念珠一云数珠見千手経にある　佛を念

まうとて佛名をとなふる数をとるまるき玉の珠なれハた
まひの玉まといひてハいはゆるおとろかすまかせにあもあら
かくさ論にいはゆる精しおハとかも玉にしくさくおほゆれ

○宝かくのをもみぬたにして　宝篋印 ホウケウイン

今撰集　寶篋印陀羅尼をくやうして往生を祈

ふかし給ふ人々をみけるに

伏見上人

りふきかくまうこのをもみぬおしてそ西へけりつきにあるにも之なる

按るに宝篋印の三字をよみかけたるなかハさためと
せしかハあらぬ

○ちりはつゑ　散杖　サンヂヤウ

中務卿親王家哥合　水　権僧正公朝

あさゆふにそゝくこそこほりぬれちりはつゑをそ折むすひけれとも

夫木集同

桜さくるに釋迦にたちける散杖をちりはつゑとも思ひさせる

ちりぬる花のひもあるまきあやめらん

○なかその川き　半月琵琶異名

玉葉集雑五　人なとくもゐをわかれゆく人に

かへるとて

四の緒をしらへつけておもひてよるなみちるなみ有ぬ氷ハ忘れし

新後撰集雑下　東二条院のなかその川浪物中け

るに男房使りにまゐりけるかしへおきけるとて　桂の緒に琵

琶をむすひつけたまはせて

常盤井入道前太政大臣

なかうへ照る月のうつりのおもかけをたちいてゝやうきくもるらん

返し

東二条院半物川浪

うきくもる海もうかるしそれにかへの月を神にやとして

濱松中納言物語　みな宮中略　かえの扉にたし

ちりのまへいはひとうきくちりはつゑの音もまひていふ

出納ハ琵琶なし

かくれたるくさ撥ことにあらえてはかくさ満めやはあらえぬる月
撥きるに 琵琶をあつかふのつきしくるは和名抄に 琵琶満月
半月者在腹之孔名也とある濁 半月の字をあつかふのつきしを
よみて異名とせしへとも琵琶の孔名は琵琶にかかりて異名
とも いひつきたるかみ事なきなへしかとは隠れかも
那しひかくもおもひしされとかとかりはいさくらむかへし
○ことむるに志さらふのなら歌也　隨求玉　スキグノ冬
散木集　旅人のとまりゆとりとわすれたりなるとこつ
けてをとむまてあらてこれはそまうとてきあくるかり
滴のをとふ出あなつけて苦むる

ことむるに志らふのなきの玉かきこえ光ならにうせぬことをしもし
夫木集同
紫きるに隨求玉をもちえるえ尤しかきを思ふなくいひ云ふ
まるやくみてさかりに上下の口川きかり

衣服　三條

えぼしひたゝれ　戎衣　ヨロヒ

小嶋口号　殿上の御遊れとかハあらてめ[illegible]ぬえぼ

しひたゝれと云う人ともの　こゝ　朝衣の人ハ[illegible]て　え

ぼしひたゝれもとうやのまかハ[illegible]つ[illegible]しき事し　こゝ　今

日くつゝえぼし衣かて供奉[illegible]　えぼしひたゝれの

次将とし　ハ　こゝ

按ずるに尚書武成ニ一戎衣天下大定とあって　戎衣ハよろひ

かふとのかして身をかためし軍[illegible]まとまてよろひといふ

きるを字にたかりて　えぼしひたゝれもとよみては戎服の人ゝ衣

服のたゝき出来しものまてハおとらさりける於ひてもきこえ
禄ハ候ともよろしく和として家文脈とみえる思ひうるさて
なかりけり

○たれかきぬ　直衣　ナホシ

尚歯会序　流くなかれか藤原帰　十年一七とよめる
きぬにつふりあをふ記の法しめきこ
梅さるみ直衣を宇治法師のみきぬとはいへ直ハとよめる
きるたと候まハかりされとかくいひてハたとらうハ法のかなし
へしなほなかしといふ歌ほしくけそ

○みかはなく　水干　スヰカン

頼政家集　女院百首の御歌梅とそれ侍りける題に
こゝろさへのはしそくをもして満ちてきるに水干紫衣を
着てたすへ人かゝ一具つくして返りる事にゝ権大進重
家か返ハしそろたとにかれはしくこえ侍りしかハ
返しとる返るにかはる
さ羽川せきハいまのかへりにけるかそ人れこえハえけるとよせて
紫をかみ千をこそ川かはととも思ひ詞いときかる事なりや

膠漆

きんのうるし　金漆　コシアブラ

宇津保物語蔵開巻

きんのうるしぬりしにはそあまし

さくは髪の筋やなど覚えていくらあり

紫花物語初花巻

花山院の清事はきんのうるしぬりといふ事にぬりしまへり

同玉臺巻

お浦へおうつのいぬふせぎはきんのうるしぬりしにぬりて

濱松中納言物語巻四

まつえりたる髪うきハそうへましハいしきよりさきまて
塗也かくもちる物ぬれくなとにきんのうるしぬらる
やうにぬるもぬりやうとして
按するに和名抄膠漆具云含漆開元式云台州有金漆樹 金漆
和名古之阿布良 とあるをけしあふらハ漉油の名也ら契沖師いへるハ漉油
の類をしらぬけらしてなからやしん用るへしさて字の酒
にきんのうるしとかゝれるハ證類本草乾漆条に金州者最
善也といふ綱目に時珍曰以金州者為佳故世称金漆人多物
乱之試訣有云微扇光如鏡懸絲急似鉤撼成琥珀色打着
有浮漚とあれハて思ひたるへきなり

草木 七條

○いしまけ いしのまけ 石竹 セキチク

永久四年百首 瞿麦 忠房

いしまけの花咲やとにいのあしてふしくさきおも海せぬいそもなし

丈木集 結句うきにいきかしとあり

散木集

君か代のまかきしに引ん春日野の石竹もあも花咲にけり

按るに文集牡丹芳ニ石竹金銭何細碎芙蓉芍薬苦尋常

とあるて今も石竹とあるにのみまうりそれにならひていしちの

まけとも見えたる也うかへくもおほえ侍る詞いかぬ

ちかひそあるや

○うみまつ　海松　ミル

土佐日記

おほつかなけふは子の日か海人ならはうみまつをたに引かましものを

恵慶法師家集　六月人の海松流に寄てみ流の字

よめる

大井川岸のみ寄せし海松は風なや瀬々にかへるらむ

同集　いよにて海松のちる書あつかりて

うきしめき見なに根ざししうみ松のみとせは誰か浪にかくらん

続古今集に入たり

源氏物語澪標巻

うみまつや時そともなきかけにゐて何のあやめもいかにわくらむ

夫木集巻廿五　浦　天禄三年五月資子内親王家歌合

読人不知

あふみの浦のしほになつさふうみまつはみきはの浪て年はあえなり

加茂保憲女家集

ふみおやとうみまつ川の根はくちもと年ときつくる山におひぬる

按するに和名抄海松崔禹錫食経云水松状如松而無葉 和名美流

楊氏漢語抄云海松 和名上同 俗用之 とあり万葉には海石の字を

用ひのきるる多しまて みるに海松の字を用ふるより海石の字

にまかせてうみまつとも見るとなり海よ思ふに海雲と云
その類なり一種ありて今も西の海には多く南国より来たるを見
てのまゝ来る人ハ常に見る事なりて唐に杉のおもてをたてることく
葉青くさかりて海松くハそのおもかげありて枝を折りて見
来るにさもしかれバ青きか日数ふれバ色かはりて黒く海梧黒珊瑚
の類なと云人ありけりハ土佐日記のなに見えたり うちあきハきいそ
ほかに根さしたるとよめる歌又源氏物語の時にとも見きうけと
よめる歌とハみゆるにハあらねは 実に木にて枝に似たるの
海底におひたるをいふなるにやあらんの能考へきことなり

○うしひくちれ　牽牛花　アサカホ

七夕歌合判詞跋長歌　一条禅閤

野辺みれば草とりふの花見えたちて来らしの花に咲し
うしひく名ある花をさく女郎花あまたあるをせめる
按するに和名抄云牽牛子陶隠居本草註云牽牛子（和名阿佐加保）
此出於田舎凡人取之牽牛易薬故以名之とあるにならひてうし
ひく名あるとハなにせむへふ之たとえなるハ草かたを移といへりける
あらぬなりや

○きのみゝ　菌　タケ

和名抄菜蔬類云崔禹錫食経云菌茸（商容反上渠殞反上声之重ヶ爾雅注云菌有木）
菌土菌石菌和名皆多介食之温有小毒状如人著笠也

同野菜類云尓雅註云菌音窘具見菜蔬類形似蓋者也四聲字
苑云萸音軟和名木乃美々木耳生枯木菌也狀似人耳而黒色 印本

和名抄先生枯二字今据畧本補正

桜かるに菌をきけとく見るハ長(タケ)き川人之笠のことくきけ
きか川なる之されハ万葉集巻十四詠芳歌 本居氏ハ芳ハ茸ノ誤トイヘリ きのこ波
とらふ此等をよせれハ皆きのこてふたくひのきのこなる松茸の
くさとよめる このきのこをも此なかに今いふ松茸和茸など
きのこも同し 又萸ハ今云木くらけのきのこなる海きく木耳と
いふもの海れともなる物なし されハきのことハ別物なるを
をまちかへし

○もみち　紅葉 モミヂ

相模家集

いくしほのまくもあるてもきつ田姫くもあかおちをそ染ぬらむん
桜もるにをもちあらたくさもあきのはにをめするさともらハちるこそ
れのこ詞優なるかや
きりかのせに　金銭 ナデシコ

文木集巻九　瞿麦　源仲正

ちりひあけぬむかしのしくれかくせともきりかのせにの花ハかくされ
桜もりふ文集牡丹芳に石竹金銭何細碎芙蓉芍薬苦尋常
ときにようて 石竹の家れにて いしきけとくもにハ海きに

くわかの類五十首百首の中にあるへし

○もちつゝし川　羊躑躅　つゝし

藤原清輔朝臣尚歯會序　詠しれもちつゝしつし

のちの世に人つたへきかり

桃をすなはちしハ羊躑躅といふなり　躑躅ハもちつゝしといふなれはなり

字にあらはして羊といはん枕詞にはしたもちつゝしといへり

されはハ清輔朝臣の造語なるへし

鳥獣

○ほとゝきす　ときのとり　時鳥ホトヽキス

永久四年百首　星　俊頼

ほとゝ河とほきあまの河原雲井にてさゝてて星の林にやつとりもとめん

家集時鳥をさへ見るとよみし丈なれは郭公の類に入

為忠後百首　夕郭公　仲正

おとたかに時のとりなきかはせとしみな河に漕入にや

十五百番歌合　家長

夢に入ぬるあけの雲路より待ならしときなきなれはあらり

桜ちるは郭公を時鳥とかくなり　ときのとりともよむ也

さてさてかれをば時鳥と云難字ことさら郭公の事なるべ
ければこれは志きてハいみしくにきこえしあらとても海[illegible]ともむ
侍しき志らにこそ

○みしとゝ　鵐 シトヽ

枕冊子 廿五段　鳥ハ　みしとゝ

按するにしとゝハ天武紀に巫鳥此を芝苔々と云 和名抄に
鵐鳥 唐韻云鵐 音巫 巫鳥之止々 漢語抄云 鳥名也とも見えて今もシトヽ
と云鳥之事のやうと巫鳥の字によりてみしとゝといへる古
語拾遺に於是大地主神令片巫 カウナキ 志止々鳥 肱巫 カウナキ 今俗竈輪 及米占也 占米 其
由とあるを思へハ志止々を巫鳥とかくゆゑかきるし[illegible]

見あるか侍るハみしとゝり見しとゝりを[illegible]なるへしふるくよりの
しとゝり[illegible]つきるへく

○くひなハとり　水鶏 クヒナ

草根集

夕海くま入江のみをの舟さしてゆくやいつこもさむみかとり
あかつきの八重見えし夕海くまさして門さしくるのみかとりま

按するに水鶏の二字を字の海にくひなハとりとこえしたること
水鶏ハくひなのことなりとされとも 和名抄に 鼃黽鳥 雀属錫
食経云鼃黽鳥 和名久比奈 漢語抄云水鶏 貌似鶏能食鼃黽故名之とあれハ
今ハ水の[illegible]なとをハ漢語抄によりて水鶏の字をのみ用ひ来

まし似つへしさて又鶏ハ蛙なとハ鼈の古と那り金匱要略に
射干麻黄湯の条に欬而上気喉中水鶏声とある又鶏声ハ瘀
飲にて喉のうちに蛙の鳴かとおもハるゝをいふ之古事にて水
鶏ハ蛙なるへしと見るへしもしハ秧鶏にてもあるへし比
れとふかの顔似とみて蓄来まゝに蛙とおもひて字義に
あらぬ古とを用ひ来れる例ハ他にも多かれハ今ハとらぬ也
あるまぬんとにハあつ猶とかなとかはつなく川の瀬
ハ又かるへしとかはつハんなるへしかはつと古とをいふ蛙をあそふ
詠みハかなりともいひぬへけれハこゝろなとのいひてあ
ゆつきなとハ略す

○かはつなく川ちかき　山梁　キジ

散木集連歌　伊予亮仲実か家に人〻あまたかはつなるを
てあそひ侍りしに都のほとりに鳥の傍しきつかりけるを見て

きゝきれハやかはつなく川ちかきにしてけり　俊頼

軒端ハ海の月をやとしけり　慈雲坊

桜花かかはつゝくのちかきとそあるハ論語郷黨篇云
山梁雌雉時哉時哉子路共之三嗅而作とあるより出て山梁雌雉
とつゝきを略して山梁となへいつ毛家の明衛か書に往来

只今或人所持氷山梁味何以加之　ことゝいはれしをしれるを
されハ音にて山梁といへるをも子細なしや海のうつはりとよみて
いふかり　論語集註に邢氏曰梁橋也とあれハ山梁（ヤマハシ）のことにて
雊雉居（ナキヰ）する雉をらく山梁（ヤマハシ）をや海のうつはりとのみにてハあらされ
はきこにまうつし

○うみのつき　虫魚　三條

海月（クラケ）

辨乳母家集　志ほ湯の底なくらきなあつしを
山の端をいりぬるのちにもやまたも海なる月のくらけなりけり

続千載集誹諧に入たり

後葉集物名　くらけちる海の月とならし人の海しき
なをききて　祭主親定母

ふかくきむ千尋の底にうつきにくらけかくゆる海の月かな

夫木集廿七　海月　源仲正

よるなかは海の月をそて海ちかきくらけも骨のあるやと

散木集連哥 中宮亮仲実か家に人〻あまた侍りて

遊びけるにまうけたるに鳥をたしまくるとて

俊頼

さゝ浪ハや海老のかハ川をのほりしてくる

慈覚坊

軒にハ海の月をかけしかも

海月ハ和名抄に崔禹錫食経云海月一名水母 和名久良介 貌似月

在海中故以名之とあるにくらけあかりハあとくらり叶へともも用

ひてまつ時のつかへし

○うみのおきな 海老 エヒ

続詞花集戯咲 人はおかしえたをきつゝ折かけるにぬきほ

とみてあるまに十九やすとて

大中臣能宣朝臣

世の人ハうみのおきなといふなれと海こそちからなれきつ浪そたつ

新続古今集誹諧にも入たり又家集にもみえたり

海老ハ和名抄に七巻食経云鰕 音遐 和名衣比 俗用海老二字 長髭虫味甘無

毒者也 長鬚虫三字 拠異本補之 とある海老の字によりてうみのおきなとハ

よめる也されとも古きよりみえたる名のへつ也とハいへれ

○ほたるひ 螢火 ホタル

和泉式部家集

ほたる火の床下草にくらこのころほとり川きの和こハ名所なるへし

接するに蛍火にて　ほたるとよむ　つきおとこと　ほたる火とも

見ゆるハよろし　ほたるハ火埀（ホタル）の意にて　火秀（ホノホ）火串（ホクシ）の例にて　火

をたと云也　されハ別に火とよる詞をそへていへるハほ二字に蛍

数をかくる　蛍一字にかゝるおとなし　おもハ神代紀下に　彼地（カノクニ）

多有蛍火光神及蠅声邪神（サハニアリホタルヒノカヽヤクカミオヨヒサハヘナスアシキカミ）と旧点あれとも　おもハ　彼地多（カノクニサハニ）

有蛍火光神及蠅声邪神（アリホタルナスカヽヤクカミオヨヒサハヘナスアラフルカミ）ともつきおとこ之　如蛍火如蠅声と

かくつきをおもと如の字を略して書　出雲国造神賀辞にも

昼者如五月蠅水沸夜波如火瓮光神在利（ヒルハサバヘナスワキヨルハホカヤクカミアリ）とあるにても思

ひたるつきとそへされハ蛍火の二字にて　ほたるとよむへし　ほたる火と云ハよろし

釋教　十一條

○さとろのおときこそ　如意輪

丈木集巻廿四　如意輪（ニヨイリン）　民部卿為家

何事もさとろねおとく輪円（ワマトカ）の清ねきにめくらめひぬる

接するに佛語をもちひて字にあかりてさとのおとるにそ満んと

讃れハおとろゝもをまかりゝる気し　如意輪をかくとみるハ走

うつることもなき世のまことおねの海のいとさゝくいけにける

とかし

○さとろをわおぼかと　發心門（ホツシンモン）

千載集神祇　熊野に詣して侍りけるとき　發心門の

王子にてよみ侍りける歌　権中納言経房

うれしくも神のちかひをしる人はみておろかならぬ心に入ぬる哉

按するにこの歌ハたとへたる事もなきなれ詞もいかにきこゆされ

小本撰者もこゝ入まし難へし

○志賀川のなかれのかゝる　寂光 シヤククワウ

夫木集廿四　寂光を　民部卿為家

しつかなるひかりのとやさしつめれハ胸に蓮の月そやとれる

按するに寂光浄土をかくよみたこしあれハたとへたるきこゆる

○あかくへかくれ

○志るはともえらぬかつる　智恵光 チヱクワウ

千載集釈教　あみたの十二光仏の御名をよみ侍りける

中ニ智恵光仏を　俊頼朝臣

よき人のこゝろはうちをよそなかるしるやはかりの光なるらむ

散木集同

按するに是もおなしきこえなり

○悪き法かくれぬ　不動 フドウ

久安百首　不動　花園左大臣家小大進

ゆちはかれぬちのきこえある絶ハおの川かる花のしてながれのかはりぬめや

夫木集同

案するに不動をゆるはかれぬとよめりくるしきなかきつとよむへ

きゝといはゝいつに花のちるなりけし字にかゝりてを侍ん
みもかゝるほとけれんちきゝみハ老つきせぬとぞ
○きかゝのうゑつきく　宝樹（ホウジユ）
続古今集釈教　花の色に極楽を思ひやらせたまひ
ろる御分　花山院
あはれちる花見ることもあはれなるものゝうゑきと思ひしれやな
夫木集同
桜ちるとまるハ字のたよりてハたゞみさせと時代の後なりけれ
むとらうもありへのうれ詞の文あれのなりや
○ちし見なき　無始（ムシ）

永久四年百首　寺　俊頼
ちし見なき花ちつとりもうれしきをぬかのたえくときつゝ
夫木集同散木集同
散木集隻
ちしぬなきみのちぢくるる諸ろあのても世ことをさしつゝ
長秋詠藻
ち見なき昔思ふてあはれなるいつとかしりかもを侍るもれん
拾遺愚艸員外
ちし見なき月みやこへにあそとさてはかるはむちのもてをさゝちや
新千載集釈教　永福門院

ちかはく悔ひそめける長夜のやみを出でいてさ悔むん
按するに無始の罪業をもちいとかしこまりける所にてしもあ
はさ非とハ佛書に無始よりの罪と常に云無無始ハ始のなき
しらせとえふの始をかき始なきといふ悔をさるハいつ 以上玉勝間 今
思ふおもひゐるの人をちハ其文字のおもてにのみようてそれ
意をわすれてとかんとしもおもハかゝるあや悔まりも多し云々ハ多く
侍あれてもはかりをとまみこの定し

○ひのいへ 火宅 クワタク

空穂物語 印本サカノ井 印巻

いつとせしかたきにも嬉しせぬこのいへを君かの庵にいそてまもらん

按するに火宅の字をひのいへとよめり釋教の歌のハかゝる経
の詞ハよみて子細ある事しき也

○みちのこゝろ 道心 ダウシン

新撰六帖 門 知家

かくしても入しハ何そ世の門みちのこゝろを思ひしあれ

按するにみちのこゝろハ優にいらひとするものハ益かりしかし

○むなしきくらにみたさむ 虚空蔵 コクウゾウ

夫木集巻廿四 為家

こゝろもられむなしきくらにみちさかりたる嵐の山のはの月

按するに虚空蔵をむなしきくらとよめる寂光をもつくりけるのさまと

きゆるにハ一まハおもひなりや

○むなしきをきはめをはるに　畢竟空 ヒツキヤウクウ

玉葉集釋教　般若心経のこゝろを

為兼

むなしきをきはめをはりてそのうへに常へと文みゆる

故ある畢竟空をかくよみたるもおもむきのこと三字にて

見てむなしきとこそハよろしぬへし無始をおもひはかるしとをみる

あやまれものゝ多へし

寺院　八條

○きゝくもあし　浄橋寺 ジヤウケウジ

続千載集雑中　浄橋寺といふ寺の橋にてかけ

侍りける　常盤井入道大政大臣

きてもあきしまよひきとをし柱橋をや世にハ人をわたさん

捨てたる浄橋寺の浄橋ハ二字をよみて寺の名とハ果せ

ゆ保多くあり

○くもゐてら　くもゐてら　雲居寺 ウンコジ

丈木集 二十四　源仲正

くもゐてらふく見きけハ帰るなる人の袖にもそらハ雨かもき

同　同

山さとの花の盛に尋来て雲かゝるてふ名をそ（え）つるかな　藤原為家

桜さくみねかゝる㑹多しらみて難ある流しきえ

○くものはやし　ハルのはやしのてら　雲林院　ウンリンヰン

古今六帖　寺　よみ人しられ

むら河の玉ちるとも見えぬくれ雲のはやしをあかしつる哉

夫木集初句白河ハ結句あかしつるかなとあり

千載集雑中　見つらふきとありて雲林院にて不知歳

かきくらし人はとふらへ見られもきこしらす　良暹法師

此世をもそむきぬはやしに門出して煙となれとゆくへそしらぬ

夫木集廿四　西行法師

桜あるに院の雲のはやしは寺なれは花ちりなむころやまさん

あきてくるとも今見る六帖ならかふるれハかゝる例ありハ見らるを

荒川いりの川へきるかとみゆれ

○志川のなるはやし　禅林寺　センリンジ

新拾遺雑中　禅林寺に時鳥をきゝて　前律師永観

志の也もたとらむ時鳥なや志川のなるはやしなるらむ

夫木集 卅四同

桜ちるに禅林をさつらぬるはやしとたれかいはゝさくらあるらむ

かしれる

○つきのはやし 月林寺 グワチリンじ

拾遺集雑上 清慎公月林寺に侍りけるに おくれて

侍りて来て よみ侍りける

藤原後生

昔よりなたかし桂のうちにあらし月のはやしにあひしにいつ縁ハ

梅花るに月林寺をまかり侍りし月のはやしとたれかいひける地

名ハ洞宿にいはれたるハよみてもあしかるへしかき

○のりのわ 法輪寺 ホウリンじ

夫木集 寺 源有房

おしなへてたのむるちかひのさしかたハのりのわにみなめくるらん

同 同 殷富門院大輔

のりの輪にめくりくる法のしるしみやかはらぬわか人のうらむらん

左注云此哥ハ人々いさなひて 大井川といふ所のついてに法輪に参りてなりていろのかをとろかぬ

たちとてのりのまへる車をハいたしつるハたえたるとなと

同 山 あらし山 西行法師

いかゝ又見たるあらしのかきのりのこのあらしおほふ山を君しいてしハ

左註云仲家ハいまた出家せさりける昔かゝ法輪に詣うて空仁法師とあひし侍るついてよみ侍ると

云云

此哥山家集にはなし

按るに法輪の字を法界の目とみるへく見らハ子細なきにや

こゝなり

○法界なるてら　法成寺　ホウシヤウジ

夫木集　寺

家長朝臣

君を法ゑのみちなるてらに法ある柱あるを見出て子世孔柱也

按るに法成寺をの里なる寺とよめるなとなるハ字にや法

しかれと詞ハいつれもあれ

○ゆきてかへるやと思　往生院　ワウシヤウヰン

新續古今　釋教

浄土の法文のときをしえし侍るついてに嵯峨の奥に往生院と云寺にあるらし人に申されハよみ侍ひける

後小松院御製

これ人のゆきてかへるやと思ふきそらさかの奥に有名

按るに往生院をゆきてかへるやともよめるハ出るをにかく院をおかしく見るもかへるかくへき

己九入補
以り